

1. バイオリンの村「岐阜県恵那市中野方町」での取り組み

鈴木バイオリン製造株式会社が戦時疎開に伴い移転したことがきっかけで、以来60年にわたって国産楽器メーカーとしてバイオリン、マンドリンなどを製作する楽器工場があり、その生産量は日本一を誇ります。昔は、多くの人々がバイオリン産業に携わり、この地方を題材とした「バイオリンの村」と言う絵本も出版されています。

しかしながら、時代の流れと共にこうした歴史的な資源が失われようとしているのが現状です。そこで、これまでのバイオリンとは少し違った、より初心者でも演奏が簡単になった楽器の製作を、地元、東濃地方出身のジャズバイオリニスト加知優磨が恵那楽器に依頼し、幾度かの試作を重ね、実際に子ども達が、学校の授業で演奏するまでに至りました。

2. 中野方小学校でのバイオリン授業

近年、小学校では「故郷の文化に根付いた授業」「特色ある授業作り」が一つのテーマにもなっています。さらには、この地方の音楽文化の醸成がこの楽器を製作するに至ったテーマでもあります。

そこで、恵那楽器のある中野方の小学6年生(12人)に、総合授業の一環として、演奏がしやすくなった楽器を実際に学習、演奏し、6月24日の中野方町青少年育成町民会議主催「ほたるコンサート」でその成果を発表する運びとなっています。

3. フレット付きバイオリン (写真は添付資料参照)

今回、加知が恵那楽器へ製作を依頼したバイオリンは、通常、指板と呼ばれる部分にないフレットと呼ばれる金属のワイヤーが埋め込まれています。この加工がある事で、初心者でも音程が取りやすく、比較的発音も明瞭になりやすいというものです。

ギターやマンドリンには通常このフレットが埋め込まれていて、実際、ギター少年というのが中学生くらいになると登場するわけです。ギターがコードを押さえるのに比べると(よくFコードで躓くと言いますが)、バイオリンは基本的に単音の演奏なので、もう少し簡単に感じるかと思われます。

バイオリンの歴史を辿ると、バロックと呼ばれるバッハやビバルディーの時代には、このような楽器があったようですが、演奏者の平均的な技術が高くなった事で、作られなくなったものと思われます。

4. ほたるコンサート6/24(土)での演奏

子ども達は、授業で取り組んできた「きらきら星」の演奏を行います。5月後半に入ってから始まった授業なので、計4回の授業での成果です。

当日は、このバイオリン授業を請け負ってる、加知 優磨(バイオリン) 粟田麻利子(ボーカル)の2人による演奏も予定されております。